
泉

mahiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泉

【Nコード】

N4524W

【作者名】

m a h i r o

【あらすじ】

キョウコは親友マホからある都市伝説を聞かされる。その数日後、マホが行方不明に。キョウコはマホのパソコンから都市伝説に関するファイルを見つけるが・・・

登山

まだ6月中ばだというのに、気温は昼過ぎから三十度を軽く振り切り、真夏日の酷暑が梅雨明け宣言を待たずに早くも顔を出して来た。

同県内の熊谷市では過去最高の記録的猛暑日になる予報。

伊沢村でもそれは同様だったが、山間の森林と御笠山から流れ出る伊沢川が自然の涼を運んでくる分、いくらかは初夏の陽気を楽しむ気になる。

県道から外れ、一キロも走らせれば、ふもとの集落と田畑、それ以外は自然。そういう言葉以外、何も無い。未開拓の、というより忘れさられた土地と言っほうがしっくりくるような世界。耳を塞げば、時間が止まった世界に写る。

車はいよいよ舗装されていない道になり、ややもすると、一台分の轍が森の中へ向かい緩やかにうねうねと這っている。

対向車がくれば立ち往生するような細い凸凹道を、軽ワゴン車は車体をひっくり返りそうなほど上下させ、土砂や草村をかきわけるときのようにつき進む。

『目的地周辺です』

急にカーナビが電子音と共に機械的なアナウンスになる。

キョウコが設定した目的地。だが本当の目的地ではない。一番最寄の目的地。ナビがそこまでしか受付ないのだ。住所登録されていない地域なのだから仕方ない。

画面上では道はとうに存在してない。

ゆっくりと徐行しつつ、周囲を見回すと、脇に獣道のような山道があるが、両脇に杭がうたれ錆ついた鎖が張られている。鎖の中央に立入禁止の札が付けられている様だが、腐食がひどく、文字は読

み取れない。その先は昼間なのに薄暗く、樹海が口を開けているように見える。

しばらく進んだ所で轍は自然消滅して、少し開けた場所に出た。軽ならなんとか切替して元来た道に引き返せそうだ。

キョウコは車をＵターンさせ、停車。エンジンはかけたまま、コピーした地図を広げ、ペンで来た道を書き加え、現在地と思われる場所にバツ印をした。

（こっちからもここまでか・・・）

リュックからコンパスを取り出し、ナビ画面のタッチパネルで現在のGPS座標をだす、地図の余白にキョウコがメモした座標と見比べ、コンパスで方角を確かめる。

地図に書かれた目的の座標には北西に約二キロほど、徒歩でどんなに遅れても一時間足らずで辿り着けるはず・・・。

（迷わなければ。大丈夫。）

そうキョウコは自分に言い聞かせ、携帯の時計を見る。まだ午後1時過ぎ、どんなに迷ったとしても日没迄には戻って来れる。

もう一度携帯を見る。携帯のアンテナ表示は圏外。

不安をかき消すように、エンジンを止め、ナビを台座から取り外し、バッテリーパックと接続し、再起動させる。

ナビのGPSは良好そうだが、バッテリーはフル充電してあるから3、4時間はもつはずだ。リュックの中の装備品も充分過ぎるほど万全にして来ている。問題ない。

（はず・・・。）

ひとつだけ、問題があるとすれば、キョウコ自身が登山に関して全くの素人だということ。山中どのような危険が潜んでいるのか、全く予想がつかない。

しかも登山者用コースのようなものはない山中で未開のルートを自分自身で切り開いて進むしかないのだ。

キョウコは車から降りて施錠し、ナビは電力の消耗を抑えるため電源を切り、コンパスと蛍光スプレー缶を取り出し、獣道の入口へ歩

く。

入口すぐ脇の木に蛍光スプレーを吹き付け、どの角度からでも確認できるようにぐるっと一周マ・キングする。

しばらく歩いて振り返りると蛍光カラーの黄色がまだよく見える。あと三十歩ほど歩いたら二本目の木にマ・キングしようと決め、コンパスで方位を確認しながら歩みを進めた。

行手は茂みと木々でまともに歩かせてはくれなさそうな上、急な傾斜や谷が待ち構えているように思えてならなかった。

とにかく少しでも前に進もう。

もうキョウコの頭の中には、目的地に辿り着く事以外の考えはなかった。

今更『一体自分は何をやっているんだろう?』という自問自答はとつくにやり尽くしていた。これ以上不安や恐れから逃げたとしても、逃げきる事などできないとキョウコは悟ったのだ。

噂話

「イズミさん？」

「そう。今ネットで流行ってるんだって、都市伝説みたいなやつなんだけど。キョウコ知らない？」

「うん。・・・？。なにそれ、怖い話？」

「まー怖いっちゃ怖いけど。怪談ではないんだよねー。コンピューターウイルスってあるでしょ？その一つらしいんだけど、たち悪いらしいのよ。ほんとかわかんないんだけどね」

「ふーん。私、自分のパソコンあんまり開かないから、そういうの疎いのよ」

駅前のカフェで、キョウコはマホと二ヶ月ぶりに再会していた。

あまり人付き合いの良くないキョウコにとって、マホは希少な親友だ。

二人は新入社した会社の同期だった。

その頃からずっと一月おきくらいのペースで二人だけの女子会をやっていた。

やっと先輩社員からのイヤミが無くなり仕事になれはじめた二年目の頃、唐突にマホは退社してしまう。

その時の事は、キョウコにとってかなりショックだった。

仕事の悩みや恋愛、親友だと感じていたからこそ、包み隠さず素直に話せる仲だと思っていたのに・・・なぜ、自分に何も相談してくれなかったのだろうか。

今だにあの時の彼女の本心は謎のままだ。

マホの退社後、なんとなく距離をおくようになってしまい、そのままが続いてしまうかとも思っていたのだが・・・。

マホの退社から二ヶ月後、何事もなかったかのように、今度の休みに会わないかと、マホからいつものような文面でメールを送って

きたのだ。

他愛のない都市伝説が話題になったのは、久しぶりの再会で花を咲かせ、お互いの近況を一通り話終えた後だった。

「・・・でね、送られて来たメールを削除しても、パソコンの中にウイルスが潜伏してるんだって。何度か来たメールを削除し続けるると、デスクトップに音声ファイルが出てるんだって。そのファイルを開くと、おばあさんの声で『そろそろイズミさんのころさね・・・』って！・・・っね。怖くない？」

「・・・ん。やっぱり怖い話じゃん。最近流行ってるネットの噂話でしょ？」

「最近、変なメール多いのよね・・・。」

マホはそう言いながらアイスカフェオレに口をつける。

キョウコは、悲しげに虚空を見つめるマホの瞳に漠然とした違和感を感じたが、かける言葉が見つからなかった。

その後、キョウコは買い物にマホを誘ったが、マホは用事があるからという理由でその店で別れた。

今思い返せば、あの時もつと突っ込んだ話ができていれば、何かもつと違う未来が開けたのではないだろうか・・・？

そう思わずにはいられない。彼女の身に何が起こっているのか聞き出せば良かったとキョウコは後悔する事になった。

電話

キョウコがマホの失踪を知らされたのは、再会の日から一週間後のことだった。

夕方、映画を独りで観に行った帰り際、めったに鳴ることのない携帯が、着信があった事をランプで知らせていた。マナーモードにしていたから、すぐに気が付かなかったが、着信時刻は、映画館を出てそう経っていなかった。マホからの着信だったが、留守電メッセージのマークが付いている。

・・・？・・・よく考えてみると、留守電にメッセージを残すようなことをマホはしない。メールで用件を送ってくるはずだ。訝しがりながら留守番メッセージを再生してみた。声の主は初めて聞く女性の声だった。マホの声とよく似ているが、明らかにしゃべり方がたどたどしく丁寧すぎていて、マホとは別人だとすぐに判った。マホと連絡が取れなく、心配しているという内容の留守番メッセージ・・・。

マホの携帯から母親がかけたものだった。が、話がとつちらかつていて、短い録音時間の尺では、なんとも要領が得なかった。すぐさまマホの携帯に電話した。マホの母親が出た。が、またもや話が釈然としない。だいぶ動揺している様子だった。とにかくマホのアパートに何う約束をし、向かった。

マホのアパートには何度か遊びに行っていたので場所は知っていた。タクシーを捕まえれば30分ほどで着く距離だった。

（早まった事をしてなければいいが・・・でも、どうして・・・、もしかして・・・、まさか・・・?!）

キョウコの頭の中はタクシーに揺られながら、マホの母親の動揺が、感染したかのようにゆらゆらと同じ思考を堂々巡りした。あの時、久々に再会したマホの表情にはどことなく違和感があった。何

がどうと説明はできないのだが、なんとなく、いつものマホではないような気がしていた。小さな引っ掛かり、最後に見せた寂しそうな瞳は、今もはっきりと思い出せる。

そうこうしているうち、タクシーはオレンジの屋根にアイボリー壁のプロヴァンス風のキレイなアパートに到着した。

マホの部屋は2階だが、入り口玄関は1階部分にあり最近流行の洒落た造りになっている。階段を上がると広いオープンキッチンとリビング。女の子の部屋の割には少し殺風景で家具らしいものがあり、清潔感のある部屋だったことを覚えている。確か白を基調としたテーブルとソファ、テレビとテレビ台、その横にちよつとした観葉植物。ぬいぐるみや写真立ての類は、掃除の時に邪魔になるからという理由で、置かないらしい。『その代わり寝室はすごいごちゃごちゃなの』と照れながら話していたのをキョウコは懐かしく想う。

チャイムを押すと、なにかが上の方からのつそり、のつそり、降りてくる気配がする。近づいて来るにつれ、人が階段をゆつくりと慎重に二段飛ばしで降りてくる音だと気づく。そんな足音がドアの近くまでやってくると……

しばらくの間が空いて。ゆつくりと音もなくドアが開かれ、マホの母親が顔を出した。

母親は、一人暮らしのマホの様子がおかしいと思い、彼女のアパートを訪ねたが、鍵はかけられておらず、部屋の明かりも煌々と付けられたまま、携帯も持たず、行方がわからない。携帯の履歴からキョウコの連絡先を知り、電話したという。

「ごめんなさいね。急にお呼びたてして。ほんと、どうしていいかわからなくて」

「いえ。私も心配ですから。それより警察を呼んだほうがいいのか

とか言っていましたけど・・・」

「ええ、そうなの。あの娘、どうしちゃったのかしら。ちょっと前まではこんな事する子じゃなかったのに・・・。部屋もひどいのよ」

「・・・部屋・・・？」

「そう・・・、ほんと恥ずかしいんだけど、ひどいのよ。2階に上がるのも大変・・・」

そう言いながら、ドアを開けたとたんに、異臭がキョウコの体を襲った。

ドアの向こう側は確かに2階に続く階段のはず。が、今、目の前あるのは通路に積み上げられたゴミの山にしか見えなかった。

悪夢

「はい……。すみません。明日は出勤します。え、いえ、大丈夫です。ありがとうございます。では……」

キヨウコは深いため息をつきながら通話をきった。

適当な理由を見つけて上司に嘘ついて当日欠勤するのは気がひける。

月曜、9時。いつもならもう出社し、バタバタしてる時刻だ。キヨウコを取残して平日という世界はまた、忙しく回り始めている気がする。キヨウコの部屋は薄明かりのまま、しんとしている。どこかで鳩の鳴き声が聞こえてくる。外は良い天気のようなのだ。

負のオーラをまといながらキヨウコは、ぼつんと昨日の服装のまま佇んでいる。結局ベッドで眠ることができなかったのだ。泣きつかれ、テーブルに突っ伏したまま浅い眠りに入りそうになると、うなされて目が覚める。

悪夢を見ていたように思うが、どんな夢だったのか思い出せない。夢とは脳の記憶を整理することだと、何かで聞いたことがある。だとしたら、昨日の出来事の追体験を夢として見ている……。？。だとしても、昨日の出来事がすべて悪夢だったらどんなにいいかとキヨウコは思う。

キヨウコが記憶していた清潔感のあるマホの部屋は、全く別人の部屋になっていた。本当にこの部屋がマホの部屋なのかと疑った。いたるところに小ささまざまなビニール袋にゴミが詰められ、無造作に放置されている。汚れた衣類が床を埋め尽くして床がどんな色だったのか判らない。ゴミ袋に見られる小さな無数の黒い点々。何だろうとキヨウコは目を凝らすとぞっとした。子バエだ。

マホの母親が換気のため窓を開けてくれてはいたが、それでもひどい悪臭を放っている室内で、キヨウコは呆然と立ち尽くすしかない。

かった。

はじめ、自殺しているのではないかと、手当たりしだい部屋中マホを探したのだと、独り言のように語る母親。憔悴しきっていた。「とにかく警察に連絡してみましよう。お母さん、私も思い当たるところ探してみますから、大丈夫ですよ必ず見つかりますから・・・」

「
そついったものの、説得力はまるでなく、自分でも頼りなく聞こえた。

母親が、警察に連絡している間、キョウコはマホの寝室を覗いてみることにした。

シングルベッドとパソコンデスクがある。ノートパソコンは電源が入ったままスクリーンサーバーの映像がずっとループされていたようだった。

思わずマウスを動かすとデスクトップ画面に切り替わる。と、キョウコは目を見張った。

普通、画面上には、よく使うソフトを起動させるためのショートカットアイコンを置いておくものだが、マホの画面上には音声ファイルが画面いっぱいに置かれている。しかも同じ題名のファイルが続く。

・・・『izumi』・・・『izumi』・・・『izumi』・・・
・・・『izumi』・・・『izumi』・・・『izumi』・・・
・・・『izumi』・・・『izumi』・・・

百以上ある同じファイル名。同名のファイルは基本的には画面上に同居できないはずなのだが、壁紙の模様のように並んでいる。習慣的にそのうちの一つを選択し、クリックする。

一瞬後悔した。と同時に、思い出す、一週間前、マホから聞かされた、あの噂。

アプリケーションは起動され、音声ファイルが再生される。

『・・・・・・・・そろそろイズミちゃんのころだね・・・・・・・・』

嗚咽

(なに・・・これ・・・)

キョウコは息を飲み込み、パソコンから再生される音に縛り付けられた。たった12秒の録音。なのに、なぜか心を一瞬でざわつかせ、それでいて聞き入ってしまう。

どこかで体感したことのあるような、懐かしさ……。郷愁？。田舎道、蝉の声、遠くで聞こえてくる祭囃子。老婆の声とともに微かに録音された状況が、キョウコの聴覚を通して体中に反響し続けた。

もう一度再生させてみる。

ざわざわと草木の揺れる音。砂利道の上を歩く足音。そして老婆の声。蝉の鳴声はひぐらしだろう、鳴き止み、また鳴き始めると同時にファイルは終了する。

もう一度再生。

もう一つ気づいたこと。『izumi』ファイルは、再生させる度に増殖する。プレイヤーソフトの中の『izumi』ファイルは優に二百を超えている。

マホが何度もこのファイルを再生させていた？何度も、何度も、何度も……。

そしてファイルは増殖を繰り返す。またウィルスをネット上に撒き散らすのだろうか。

まるでクモの卵が孵化する様に、一斉に殻をやぶり、無数の子供が、親を捕食する……。

そんな連想をしてしまい、口を抑え、マウスから手を離れた。

マホは何を感じ、どう過ごしていたのだろう。会社を辞め、先週再会するまでの数ヶ月間を・・・。

それとも病はそれ以前にすでに進行しつつあったのだろうか。気づくと大粒の涙が頬をつたっていた。せき止めていた感情が溢れ出る。止まらなかった。思い切り叫びたい衝動に駆られた。

（マホごめんね。ごめんねマホ。気づいてあげられなくて。ごめんね・・・ごめんね・・・ごめんね・・・）

こみ上げる後悔、罪悪感、恐怖、さまざまな感情が鳴咽にかわる。

目眩

警察がマホの自宅に到着したのは、そう時間はかからなかった。たまたま近くを巡回中だったのかもしれない。まだ外は明るかったが近所に配慮してのことか、テレビドラマのような派手な登場とは対象的に、パトカーは静かに横付けしている。

二人組の警官は、落ち着いた感じで、マホの母親から一つ一つ順を追って事情を聴取していた。細身で背の高い、まだ20代前半ではないだろうか、若く見える方の警官が、母親と対応し、もう一人の中肉でいかにもベテラン風の40代ぐらいの警官が、感情を一切表に出さない顔つきのまま、室内を一通り検索しているようだ。たまに無線で何かしゃべっている。

「わかりました。すぐ搜索依頼します。娘さんの立ち寄るような場所をご存じですか」

「いえ……。わかりません。あの子は、私の事嫌ってましたから……」

マホと母親は血が繋がっていない、義理の母親だ。産みの母親はマホが7才の時、病気で他界した。今の母親は17才の時に父親が再婚した後妻だった。その父親も、再婚後すぐに事故で亡くなっている。

以前、キョウコはマホから聞いていた。

ただ、事の成行を呆然と見守るしかなかったキョウコは、警官から基本的な質問をいくつかされたように思うが、なんと言って応えたのか、覚えていない。

はつきり覚えている事といえば、あの12秒間の音声。頭から離れなかった。

一体何なのだろう。あのパソコン・・・。

マホが話していたウィルスと同じファイルが存在している。
しかもあんなに沢山コピーされて・・・。

やっぱりウィルスのせいで壊れているのだろうか・・・。

だとしても、マホの失踪と何か関係があるというのだろうか・・・。

『イズミさん』って、なに・・・。

答えの出ない疑問ばかりが、次々と湧き出し、頭の中をぐるぐると回らした。

見えてる景色が、ぼやけ、ゆがんでゆく・・・。

めまいに襲われた。

結局、そのまま気分が悪くなったと言って、その場を立ち去り、
どうやって帰ったのか記憶にないが、気がつくまで帰宅していた。

検索

キヨウコは軽くシャワーを浴び、身仕度を整え、マホの自宅へもう一度行くこうと考えていた。

マホの母親が、あの部屋でマホの帰りを待っているとは思えにくかったが、血がつながっていなくても心配してマホの様子を伺いに訪れるほどだから、マホの携帯にかければ連絡がとれるだろうと思った。

何度目かのコールの後、やはり母親がでた。

精神的にボロボロの声で、

「ああ、キヨウコさん。昨日はありがとうね。体調、大丈夫？」

「はい。・・・すいませんでした。昨日は気が動転してしまって・・・。お力にもなれずに・・・」

「ううん。助かったわ。一人じゃどうしていいかわからなかったものの」

「今、おばさんは、マホの家にいるんですか？」

「うん、今着いたところ。警察の人に聞いたら、部屋のゴミは処分して構わないって言ってたから。すこし片付けながら、手掛かりになるものを見つけようと思って」

「私も、同じ事考えてました。・・・私。まだ納得出来ないんです。この前会った時は、普段通りだったんです。だから、どうしてって・・・」

また、涙が溢れてきた。

「マホは本当に良い友達を持ってるのね。私は良い母親には成れなかったけど・・・でも今日は、お仕事あるんでしょう？」

「いえ。有休もらっちゃいましたから。いいんです。今のままだと仕事にも身が入らないんで」

そう言ってマホのアパートに行く旨を伝えて、通話をきった。

ふと、自分のノートパソコンに目をやった。

あの日、カフェで噂した会話を思い出す。

『ねえキヨウコ、いずみさんって、知ってる?』

本当にそんなコンピュータウィルスが出回っているのだろうか・・・。

キヨウコは、パソコンの電源を入れた。

検索エンジンにキーワード『いずみさん コンピュータウィルス』と入力し、『Enter』キーを押す。3万件以上ヒットした。

和泉市のホームページや、投稿小説のタイトル、便利屋『PCウィルス駆除』、鳥インフルエンザ、大阪 泉の広場の都市伝説・・・。

マホが話していた都市伝説に関係するものがあるのだろうか、半信半疑で次々ページをスクロールさせては更新させていく。

だんだんと知りたい情報の主旨から離れた結果になってきているのに気づき、ため息をついた。

急に、画面右下の、メニューバーからコメントが表示される。

自分の行動を、画面の向こう側から誰かに見られているような、そんなタイミングで・・・。

コメントの意味を理解するより早く表示は消えたが、キヨウコは『何か』直感した。

『新着メール受信しました』

閲覧

メールボックスを開くと、未読メールが一通届いている。送信元は明らかにマホのパソコンからだ。

以前、マホとネットのアドレスを交換したことがある。

マホのパソコンからメールを送信してきた・・・？。

マホの母親が送った可能性もあるが、まずコンピュータウィルスが原因だとみて間違いないだろう。一斉送信されたのだろうか？だとしたらあまり良い想像はできない。

とにかくウィルススキャンソフトでチェックしてみた。が、ウィルスの痕跡は見つからなかった。件名は未入力、添付ファイルは無し・・・。

中身がわからないだけに不用意に開いていいのかどうか迷う。不気味だ。

がちが空かないので、メールを開く事にした。

クリックすると、また同じ疑問にぶち当たった。

メールの内容は、たった一行URLが書かれているだけだった。

httpから始まるアルファベットの羅列は、どんどんキョウコを闇の奥へ招き寄せているように感じられる。

もう既に一度悩んだ事で何をまた悩む事があるのかと、キョウコはURLにカーソルを合わせ、クリックする。

しばらくするとブラウザが少しづつ全体を表示してゆく。見慣れた検索エンジンサイトの地図情報だ。

何処だろうか、だいぶここから離れた場所の地図のようだ。何県？御笠山という文字が地図上に表示されているが、地理に疎いキョウコには全く見当もつかなかった。

ほとんど山岳地帯だ。その一点、何もなさそうだが、そこを中心として地図が広げられている以上、ここが何かの目的地なの

だろうか？。道路や施設、民家など、衛星写真を拡大しても何も写っていない。ただ森林が上空から撮影されているだけ・・・。

しかしおかしな事に、サイトシンレビューがこの一地点だけ、閲覧できる。そんなアイコンが存在する。

基本的にサイトシンレビューは、ロードサイドを撮影し、道路上の実写画像を360度回転させてその景色を知る事ができるツールだ。先日、プライバシー保護の観点から賛否が問われ、TVで話題になっていた。

・・・なぜ、ここだけ・・・？。

提供サイト側の入力ミス？・・・バグ・・・？。こんな所の風景写真を掲載したところで、一体何になるというのだろう・・・。掲載したところで、どうせ森の景色。

キョウコは、アイコンをクリックし、写真をアップロードした。
やはり森の景色だった。

一体自分は何をしているんだろうかと思いながら、マウスをドラッグしながら景色を回転させていく。

雨あがりに撮影したのだろうか、地面が湿って、霧が立ち込めて視界が悪い写真だ。180度回転させたところで、急に暗くなった。違った。人の顔だ。

キョウコは理解すると声にならない悲鳴を上げながら、マウスを投げ捨てた。腰が抜けた。

アップすぎてピンボケ写真だが、確かに人がレンズを覗いて、こちらを見つめ返している。その目だけが鈍く光っている。

記憶

キョウコがマホのアパートに着いた時には、もう昼過ぎになっていた。

あのブラウザからの恐ろしい画像が気を抜くと無意識下から、ふと目の前にちらついて身を震わせてしまう。

キョウコは、あれ以上パソコンをいじる事ができなくなり、シャットダウンさせ、化粧もそこそこに、逃げ出すようにして外出した。意識的に、思い出すまいとすればするほど、動悸は激しくなり、あのサイトの地図情報が気になって仕方がなかった。

マホの母親に相談しようかとも考えたが、また余計に気苦労かけるのは忍びなかった。

かといって、マホのパソコンがウイルスに感染していて、誤作動で送信されたメールを開くと、変な画像が出てくるとい話を、警察に届けるべきなのか、判断つきかねた。

「壊れてますね」で、片付けられる気がする……。

関係者からしてみれば何でもマホの失踪と関連性があるように直結して考えがちになるが、部外者からみればそうは思わない。自分が逆の立場なら……。多分そうだろう。

驚いた事に、産廃業者のトラックが止まっていて、マホの部屋のゴミを次々と荷台に投げ入れている作業員がいた。

なんとも手回しが早いな、と関心した。

ベランダを見上げると、洗濯物を干しているマホの母親の姿があった。キョウコと目が合い、軽く会釈した。ゴミ袋を両手で何個も携え階段を降りてくる作業員をかわして、階段を上がると、あれだけあったゴミが、ほとんどなくなっていた。

マホの母親は洗濯物に取りかかったらしい。浴室は、衣類の山ができている。その奥で、洗濯機がガンガン音を立てて揺れている。

「ごめんね。キョウコさん、心配かけて。体調悪かったんじゃない？」

そういう母親の方が顔色がよくない。おそらくあまり寝ていないのだろ。目が真っ赤に腫れている。

「いえ、大丈夫です。それよりすごいですね。もうこんなに片付いてる。」

「何かやってた方が気が紛れるから……。朝、ゴミの回収の人に聞いたら、有料だけど業者手配できるって言ってくれて、頼んだの。私一人じゃこの量は無理だから……」

「警察から何か連絡ありました？」

「ううん、まだ何も。近くの公共施設からマホだと思われる人が現れれば連絡入るって言ってたから、まだ見つかってないんだと思う」

お互い、あまり悪い方向へ話が進むのを避けるように黙ってしま

う。

「じゃあ……。私、キッチンの方、片付けますね」

「ああ、いいのに。気にしないで」

「いえ。私も、何かしないと落ち着かなくて」

そう言ってキョウコは、流しの汚れ物に手を付け始めた。浴室の洗濯機は早くも二回戦目の終了のメロディが鳴った。

キッチン周りをあらかた片付け終わり、ゴミの回収業者が去ると、室内は急に静まりかえった。

キョウコの足は自ずと寝室に向いていた。

マホのノートパソコンの前に立つ。パソコンは閉じられていた。
・
・?
・
・

マホの母親も衣類を集めに部屋に入ってきた。

「あの……。昨日このパソコン、おばさん使いました？」

小脇に空の洗濯かごを抱えたマホの母親は、首をかしげながら、

「・・・うーんと、いいえ。何も触ってないけど・・・」

「電源入りっぱなしだったと思うんですけど」

「うーん・・・。どうだったかしら、よく憶えてないのよね・・・
ごめんなさいね」

「そうですか・・・」

キョウコはパソコンを開き、電源ボタンを押した。

「点けっぱなしのまま帰ってしまった気がしたので・・・」

昨日は、色々な事が一気にありすぎて、気が動転してしまい、意識が散漫だった。そのせいで自分の記憶にキョウコは自信を持てなくなりつつあった。

確かに、あのファイルはパソコンの画面いっぱい、敷き詰められていた・・・

しかし、今、パソコンを起動しデスクトップが表示されると、

『izumi』という名の音声ファイルは、どこにも存在しなかった。

暗闇

何もない。ぽっかりと空いた穴。

その奥の暗闇。

その暗闇の奥をキョウコは覗こうと目を凝らす。

暗く、何処までも続くかのような、吸い込まれそうな黒。

・・・

・・・鏡・・・？

こちら側を覗いている自分がある。自分を見つめ返す自分。

ふと、我に還ると。パソコンの画面に映る自分の瞳。

永遠に感じられた、つかの間。キョウコは何も映っていない画面の前に立っていた。

画面に反射した自分の姿の肩越しから、怪訝な顔をしているマホの母親がいる。

「いえ、すみません。私の勘違いだったみたいです。なんでもないです」

軽い頭痛がする。

自分でパソコンの電源を切ったのだろうか？まるで覚えがない。

時間の感覚がおかしいと気付いたのは、そのすぐ後のマホの母親の発した言葉だった。

「やだ、もうこんな時間。ごめんね、キョウコさん。いろいろマホの事調べてくれて、疲れたでしょ」

時計を見ると5時を過ぎていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4524w/>

泉

2011年11月30日00時58分発行